
アサシンとお手伝いロボのほんわか日和

紫恩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アサシンとお手伝いロボのほんわか日和

【Nコード】

N0195N

【作者名】

紫恩

【あらすじ】

ある日、レオナルドの家を訪ねたエツイオは、レオナルドが散歩中に拾ったらしい「丸い球体」（エデンの果实ではありません。）を手にした途端、光に包まれ、グラールという惑星に飛ばされることに…！

そこでエツイオが見たものとは…？

プロローグ「アサシンと2人の女性の出会い」（前書き）

タイトルにあります、「お手伝いロボ」はファンタシースターユニバースでの作者のサードキャラ「二宮こいき」（キャスト女性）の設定上となっているので、その点を了承していただけるとありがたいです。（小説に出てくる、紫恩のお手伝いロボという設定になっています。）

プロローグ「アサシンと2人の女性の出会い」

アサシンクリード2の主人公、エツィオ・アウデイトーレ・ダ・フィレンツェがひょんなことから、グラールに迷い込んで…！そこで、ガーディアンズ所属の二宮こいきと出会うことになる…。

プロローグ「アサシンと2人の女性の出会い。」

時は15世紀末 イタリア…。白い衣を纏った青年がいた。その名はエツィオ・アウデイトーレ・ダ・フィレンツェ。宿敵に、父親と弟と兄を殺され、復讐に燃えていたのであった…。

レオナルド・ダ・ヴィンチの家。

「レオナルド。写本もってきたぞ。」

「あ、エツィオ。写本をもってきてくれたんですね！早速調べてみますね。」

と、エツィオが持ってきた、「伝説のアサシン」アルタイルが残したとされる写本をレオナルドに手渡し、解読してもらった。

「レオナルド、調子はどうだい？」

写本を解読しているレオナルドに声をかける。

「ふむふむ…。あと少しで解読完了ですねー。」

「そうかい。…レオナルド、あそこの見知らぬ物体はなんだ？」

レオナルドの部屋をきよきよ見渡しているエツイオがレオナルドの暖炉の上に置かれている丸い球体を見つける。

「ああ、これね、散歩している途中、拾ったんですよ。見慣れない物体だね。見てみるかい？」

「ああ…。」

レオナルドが散歩中に拾ったという「見慣れない物体」がこの後、エツイオを巻き込むとは知らずに…。

「これか。面白い物体だなあ…。」

「でしよでしょ。って、何か光り始めてるけど…。」

「!?!」

エツイオが手にしている物体がいきなり光り始め、エツイオを包むのではないか!

「エツイオ!!! 大丈夫かい!?!」

「ああ! 周りが見えない!!! 眩しすぎて! レオナルド、助けてくれ!!!」

「エツイオ!!!」

エツイオは見慣れない物体とともに光に包まれて、どこかに消えていった…。

「ここは、ラフォン・レリクス内部…。最近、イルミナス事件が終局したばかりで、レリクス発掘も再開され、研究などに使われるようになった。」

「…こいき。この先に敵の気配があるそうか？」

「紫恩様。わずかですが、気配はありますね！」

機械仕掛けの女性Ⅱキャスト女性、ヒューマン女性が2人たたずんでいた。

「つたく、発掘作業も再開だってさ。ガーディアンズも面倒くさいことをしでかすぜ。」

「仕方ありませんよ。紫恩様。」

「だよなあ…。」

男勝りのヒューマン女性Ⅱ紫恩は、発掘作業を面倒くさく感じているらしい。

「では、先に進みます…!？」

「!?! あれは!？」

いきなり、光が出始め、それと同時に光に包まれた男性が現れ、光が消え、倒れこんだ。

「白い衣…?」

不思議そうに見つめている紫恩。

「！！敵に感づかれたようです！こちらへ近づくのを感じます！」

「…うるさいな。大声出してどうしたんだ？」

エツィオが目を覚まして、大声で叫ぶこいきに対して、少し不機嫌そうな顔をする。

「気が付いたのか！ここは敵が来るから、早く逃げなさい！！」

エツィオに対して、早く逃げるよう促す紫恩。

「…敵？兵士なのか？」

「へ、兵士？」

「兵士」という言葉にきょとんした紫恩。

「！！紫恩様！！攻撃態勢に入ってください！スヴァルタス1匹のようです！これは強化されているようですね。」

と、巨大兵士のような生物Ⅱスヴァルタスが攻撃態勢に入ったのだ。今まさに攻撃しようとしている。

「ちっ。スヴァルタスカ！これはまた厄介なやつがでたものだ。」

「それと同時に、お供のゴルモロも出てきたようですね。」

ゴルモロと呼ばれた小型生物が10匹以上うじゃうじゃしている。

「ゴルモロ？スヴァルタス？兵士なのか！？」

「えっ?!ここは危険だから、早くにげな！」

紫恩が再度逃げるよう促そうとしたら、エツィオの声にかき消された。

「俺は戦える!だから、今は一緒に戦おう！」

「…紫恩様。どうやら戦えるようですね。補助や回復のサポートも忘れずにお願いします！」

「ああ。わかった。お兄さんよ。怪我でもしたらあたしにいつてくれ。回復してやるからね！」

「ああ。宜しく頼むよ。」

青年、こいき、紫恩VSスヴァルタス&ゴルモロのバトルが今、火蓋を切って落とされた!!

次回へ続く…。

プロローグ「アサシンと2人の女性の出会い」（後書き）

皆様初めまして。小説を書くのが大好きな紫恩と言います。（^^）
アサシンクリード2は動画を見て、惚れてしまいました。まだ未購入ですが、いずれ購入する予定です。なので、アサクリ2の設定などは自分で調べてから書いているので、間違っている場合があれば、一言いただけるとありがたいです。

ファンタシースターユニバースは、私が唯一プレイを続けているオンラインゲームです。今回は、サードキャラの「二宮こいき」（キヤスト女性）にスポットを当てて、エツィオとの交流を通じて、友情を深めていきます。

「紫恩」は私のメインキャラです。

第1話「巨大兵士&小型生物VSアサシン&ロボ&魔法剣士（前書き）」

プロローグで、グラールに飛ばされたエツィオと、飛ばされた先でたまたま居合わせた二宮こいきと紫恩。突如、敵が出現し、戦うはめに…。

第1話「巨大兵士&小型生物VSアサシン&ロボ&魔法剣士」

前回、グラールに飛ばされたエツィオ。飛ばされた先でたまたま居合わせてたという二宮こいきと紫恩。エツィオがレリクスに降り立った影響で、敵が暴徒化し、戦うはめに…。

ラフォン・レリクス内部…。

「このスヴァルタスというやつ、強力だから気をつけろよ！お兄さん！」

「ああ、気をつけるさ。お嬢さん。名前は今はあとだ！」

「紫恩様！！こちらに向かってきます！！補助をお願いします！！」

ゴルモロたちがこちらに向かってくるのを察し、紫恩に補助を促すこいき。

「ああ！OK！じゃ、いっくよー。補助かけちゃうぞー」

と、杖から赤、青を唱え、アグター形パール魔道具から黄、白を唱えた。デルビー

「おっ？様々な色の輪が俺を囲んでいるな。これは？」

初めてみる「魔法」に興味深々のエツィオ。

「これはね、戦闘をサポートしてくれる魔法よ。今は攻撃しないからね！あ、ギレスタもかけないと！」

と、もう一つの杖に持ち替えて、コンゴウラ光を唱える。

「傷ついても、これがあれば、少しずつ回復していくのよ！さあ、いこう！」

「ああ！ありがとう！」

紫恩の補助と回復のサポートを受けてから、急に強くなったことを感じるエツィオはまず、小型生物を攻撃する。

「グシャアアアア！？」

エツィオの剣で斬ったあと、ゴルモロが生々しい音を立てて、切断面が見えるほどに裂けていった。

「剣さばきが良いですね！」

「訓練すれば、そんなものさ！」

剣さばきのよさに思わず感心してしまったこいき。

「では、私もいきますよ！！！」

と、アंक・ブッティ大きな斧に持ち替えて、ゴルモロに切りかかる！

「この鍛えたスキルをとくとみよ！！ジャブロッガアアア！！！」

アंक・ブッティ大きな斧に力を込めて、勢いよくとび、ゴルモロを吹き飛ばす。もちろん、吹き飛ばされたゴルモロは壁に激しくぶつかり、肉片が飛び散っていった。

「おいおい、相変わらず、グロいねえ…。こいき。」

「ふふ。こんなものですよ…。」

「じゃあ、このゴルモロとやらを殲滅すれば、あのでかい兵士に攻撃を仕掛ければいいな？」

「そうよ。そのとおりよ！まずは雑魚を一掃してからね！さすがお兄さんね。」

エツイオのナイスな質問に感心した紫恩が答えた。

「そのお嬢さん。戦わないのか？」

「いや、戦うさ。あたしにとっておきの魔法があるんだもの。おーし！ノス・ディーガあ♪」

と、本らしき杖〔モタブの預言書〕に持ち替えて、その本からノス・ディーガ（3つの土の光を発生させ、敵を追尾していくテクニク）を発生させ、ゴルモロたちを追尾していく。

「ぐおおおお・・・。」

ノス・ディーガの影響で、ゴルモロたちがしびれてしまったのだ。

「今よ！」

チャンスだ！と、エツイオに促す紫恩。

「おう！暴れさせてもらおうよ！！」

と、エツィオが剣をぶんぶん振り回して大暴れする！

所々で、肉が生々しく裂ける音が聞こえる。

「ゴルモロは全滅したみたいですね。さあ、あとはあなただけです
よ！」

ゴルモロたちの死骸が所々転がってる中、こいきは全滅を確認し、
スヴァルタスに挑発する。

「おー。挑発か。俺もよくやったもんだー。」

こいきの挑発を見て、自分もやったなあって懐かしむエツィオ。

「へえ、あるんだ。お兄さん。」

「へへ。こう見えてもけんか強かったんだぜ。：おっと。そんな話
してる場合じゃない！あのでかい兵士を懲らしめるぞ！」

「おう！」

「はい！」

エツィオの掛け声で、士気をあげた2人の女性はスヴァルタスに切りかかる！

「グオオオオオ！」（スヴァルタスのうなり声）

「おお。いいうなり声だねえ♪でも、俺の手にかかったらそれおしまいさ!」

と、ショートブレードを振りかざして、切りかかる。

「!! まって! そいつ硬い! 弱体かけるからね!」

「なに!? それをはやくいってくれ!」

スヴァルタスの前に立ち止まってしまったエツィオ。

「ウオオオオオ!!!!」

と、大きな剣を振りかざして、エツィオに切りかかる!

「危ないっ!!!!」

と、こいきがエツィオをかばう!

「こいき!!」

「うつ…。こんなキズなんてへっちゃらですっ…。」

スヴァルタスの攻撃で、深いキズを負ってしまったこいき。キズの内部はたくさんの部品が見えている。

「…血がでない!?!」

こいきの傷を見て、驚くエツィオ。

「ああ、説明はあとだ！大丈夫か！？」

「はい。大丈夫です。ちょっとぶち切れてしまいました…。SUVウェポン発射いたしますっ！！！」

「ああ、こいきを怒らせちゃったよ…。」

「なんだありゃ！？空からでかい武器がふってくるぞ！？」

突然、上空から大きな輪が降りかかってくるのに驚いたエツィオ。

「あれは、こいきのようなキャストたちだけにしか使えない特別な武器《SUVウェポン》なんだよ。」

「ああ…。なるほどね…。って、スヴァルタス！！！」

「ああ、あの武器は強力すぎるから、スヴァルタスなんてへっちゃらよ。」

「今日のメインはこれですっ！！！！！！！！！」

と、強力な武器パラディ・カタラクトを選び、無数の光の矢がスヴァルタスめがけて降り注いだ！

「すごいな…。」

「でしょ！こいきはすごいだよ！」

と、目線をこいきからスヴァルタスにずらしてみると、スヴァルタ

スは無数の光の矢を浴びて、ばらばらに裂いてしまったのだ…。

「おー。面白いなあ…。」

「あはは。お疲れさん！こいき！」

「はあはあ。紫恩様。お疲れ様です。ちょっとプログラムが狂いそうです…。」

と、よろめくこいき。

「えっ。大丈夫か。深い傷を負ったせいかな！すぐ、メディカルセンタ―に運ばないと！ほら、あんたも手伝って！」

「え？俺も？」

「そうよ！名前だけ教えておくわ！あたしは紫恩！」

「私の名前は二宮こいきでございますわ。」

「じゃ、俺の名前はエツィオ・アウデイトーレ・ダ・フィレンツェ。」

「長い名前ね！じゃ、エツィオと呼ばせてもらうわ！」

「エツィオさんですね。了解…で…す…。ピーピー」

警告音が鳴り響く。

「！？また敵か！？」

「警告！ボディやデータ保護のため、あと10秒でプログラムを停止させます！！」

「警告メッセージか…。」

「警告メッセージ？敵じゃないのか？」

「ええ。エツィオ。これはこいきが深い傷を負ったとき、こいきの体とかデータとかを保護するため、プログラムを強制終了させるのよ。そのため、警告音を発するのよ。10秒後にプログラムを停止するんだよ。」

「そうか…。こりゃ、大変なことになったな。」

「うん。…プログラムを停止したみたいだね。どうりで、目を瞑ってるわけだ。」

「…死んだのか…？」

「いや、プログラムを停止しただけで、死ではないわ。」

と、こいきの顔を見て、こう答えた紫恩。

「なら、よかった…。」

胸をなでおろすエツィオ。

「さあ、いきましょー！！あなたの身柄についてはあとで話を聞いておくわ。」

「ああ、ありがとう。」

と、こいきを2人がかりで運んで、Gコロニーに戻っていった…。

続く！

次回は、エツィオが元の世界に戻る術が見つかるまで、こいきのマイルームに居候することに。

「え？お手伝いアサシンがやってきた！？」

第1話「巨大兵士&小型生物VSアサシン&ロボ&魔法剣士（後書き）」

最後の部分がまとまりのない文章になってしまいました…。（^^；
とりあえず、残酷な描写を書き加えてみました。あまり残酷じゃなく
てごめんなさい。

それから、紫恩と二宮こいきの外見を書き忘れたので、ここに書いて
おきます。

紫恩…。紫色のショートヘア。前髪は右寄りでちよいとウェーブがか
かっており、右目が隠れている。決して、ゲゲゲの鬼○郎ではない
ので。服装はクインティリーズの紫色。

二宮こいき…。金色のポニーテール。赤いフレームのめがねをかけて
いる。前髪は二分けしている。パーツは、黒のノーノシュヴァン
ツ。人間に近い作りをしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0195n/>

アサシンとお手伝いロボのほんわか日和

2010年10月9日08時57分発行